

フジロック延期でも…

毎夏、国内外から10万人以上のファンが集った。ステージには、ノーベル賞を受賞したボブ・ディランら一流アーティストが次々と上がった。今夏、ステージもテントもない静かなその森に、たえずむファンの姿があった。

野外音楽イベント「フジロックフェスティバル」の舞台、湯沢町の苗場スキー場。新型コロナウイルスの影響で来年に延期となったが、開幕予定日だった21日には、「苗場が第2のふるさと」というファンが次々に訪

危機 次への一步 第3部 観光交流の行方

<1>

れた。スマートフォンで写真を撮る人、草の上に寝転んで音楽を聴く人。苗場が醸し出す自由な雰囲気、キャンプをしながら思い思いに時間を過ごすスタイルを愛する人たちが懐かしそうに森を歩いた。「聖地巡礼みたいですね」。地元湯沢町の会社員高野洋平さん26はフジロックの赤いフラッグを掲げ「歓迎」した。

スキー人気をけん引した苗場はかつて、冬のイメージが定着していた。だが、1999年のフジロック誘致後、新たなファンを獲得。「苗場と言えばフジロック」とも言われ、国内フェスの代表的存在となった。ゲストハウスや飲食店を営み、地域活性化に取り組む地元出身の元アルペンスキー日本代表、皆川賢太郎さんは「苗場のリブランディングとなり、新たなカルチャーが生まれた」と語る。

新型 ウイルス

新型コロナウイルスの影響で相次ぐ大型イベントや祭りの中止・延期。県内の観光誘客は大きな壁にぶつかっている。国は観光支援のキャンペーンを展開し宿泊旅行を促すが、文化、経済活動が停滞してしまった観光地への効果は見えない。

観光イノベーションを研究する高崎経済大の井門隆夫教授は、こう指摘する。「新たな観光は共感を求めて人が動く。これまで築いたファンとのつながりを強みに、地域の個性を強く打ち出す必要がある」

連載企画「危機 次への一步」第3部は、地域資源を見詰め直し、魅力を伝えようと模索する、本県の観光交流の行方を追う。

フジロックを誘致した苗場スキー場。ことしの開催が延期されたことなどから、苗場プリンスホテルの夏場の利用は大きく減少した。湯沢町三国（本社へりから）

